

第 25 回 CAOS21 の会術者印象記



JCHO 横浜保土ヶ谷中央病院

小林 聡

カオス 21 の会のお話をいただいたのは今年の 1 月のことでした。元世話人代表の稲村先生のご紹介でジャメックスの細川さんとお会いして、カオス 21 の会について教えていただきました。会の歩みということでこれまで行った施設、術者のリストを見せていただいて驚愕したのを覚えています。こんなにそうそうたる先生方がやってきた会に自分が参加していいのだろうか大きな不安を感じました。そこからのスタートでした。

それから会が行われる 8 月までの 7 か月間は緊張と不安の連続で、ことあるごとに思い出しは不安に駆られて眠れない夜を過ごしていました。樋口先生や真鍋先生などカオスの会のメンバーの先生には「カオスの会は厳しいからね。」とさらにプレッシャーをかけられます。稲村先生に相談すると、あんなに熟練した技術を持った先生でもライブサージャリ - には苦勞したとおっしゃっておいりました。PEA を見せる予定が全摘になってしまったなど、恐ろしい経験談も教えていただきました。それを踏まえて大切なのは、「周りに合わせることなく自分のペースでやること、かっこよく見せようと思わないこと。」とアドバイスをいただきました。そういえばだいぶ前にも海外の学会でライブサージャリ - を見ているときに恩師の門之園先生が似たようなことを言っていたのを思い出しました。「予想外のことは起こりうるけど、その時にどう対応するかが大切で、かっこつけたり、ごまかしたりするのではなく、誠実に対処すること。普段のありのままを見てもらって、ダメならそれで仕方ない。」とおっしゃっていました。普段はかっこつけたがりの門之園先生からそのような言葉がきけるとは思わなかったので感動して今でもよく覚えています。

まず苦勞したのは症例を集めることです。私に与えられたテーマは緑内障インプラントでしたので、エクスプレス 1 例とバルベルト 2 例、合わせて 3 例をどうしても集めたいと思っていました。比較的症例が多いとはいってもバルベルトはもともとそれほど多い手術ではないので、平均月に 1、2 件です。ところが、バルベルトは緊急性のある症例が多いので何か月も待たせておくことができません。もうこれは、運を天に任せて直前に症例が来るのを祈るしかありませんでした。日ごろの行いかどうかはわかりませんが、奇跡的に症例も集まりました。しかもバランスよくエクスプレス 1 件、バルベルトも前房タイプ 1 件、硝子体タイプ 1 件と願ってもない組み合わせでした。

カオスの会の当日は 1 週間連続猛暑日という記録的な暑さの中、はるばる富山から移動してきた先生方は疲れもみられず、元気いっぱいの様子でいらっしゃいました。今回の参加人数は 17 名ということでしたが、2, 3 名の見学者ならまだしも、これだけ大人数の前で手術をした経験はありませんでしたので、先生方が入室してきたときに想像していたよりもさらに緊張が高まってきました。始まる前に荒井先生からは「ライブは実力半分も出せばいいから。」と、樋口先生からは「頑張りすぎないで、いつも通りやれば大丈夫。」と心強いお言葉をいただいたのがうれしかったです。

1 例目はエクスプレスでした。早速カオスの会の厳しさを実感したのが、先生方の見る距離が近いことです。顕微鏡の真横や、私の真後ろに陣取りモニターを見つつ手元もチェックされます。患者さんではなく術者の私の心拍数が上がっていくのが自分でもわかりました。エクスプレスはレクトミーに比べて低侵襲で手術が簡単というふれこみで発売当初は爆発的に売れていましたが、じつはそこまで成績が良くないのではないかと最近はやや下火になりつつあります。ただ、終了時の濾過量や術後管理の工夫でレクトミーと同等の成績は得られると思っています。幸いやや出血が多かった以外は手も震えず、大きなトラブルもなく終えることができました。野球でいうと最初の 1 アウトを取ったような感覚でしょうか。だいぶ落ち着くことができました。

2 例目はバルベルトの前房タイプです。落ちついて少し自信が出たのも束の間、まさかの直筋の制御に苦勞して焦ってしまいました。何とか乗り越えて、大きなトラブルもなく手術を終えることができましたが、予定外の所でこずってしまいすっかり疲弊してしまいました。バルベルトはもともと難治性緑内障に対する手術として認知されていましたが、TVT スタディにより難症例以外もレクトミーよりも成績が良いということが証明されました。前房タイプは角膜内皮に注意が必要ですが、適応は少しずつ広がって将来的に症例数は増えていくと思います。

とうとう最後の症例です。体は疲労困憊ですが逆にテンションは上がってきました。私は趣味でマラソンをしています、いわゆるランナーズハイのような状態と同じ感覚でした。そんなテンションのためかどうか、強膜フラップを作る際につい刃が深く入りすぎてしまい、毛様体が露出してしまいました。なかなかどの症例もいつも通りやるのは難しいと改めて実感しました。最後の症例もこのようなマイナートラブルに苦しめられながらもなんとか最後までやり遂げることができました。最後の症例が終わった後、となりの先生方の控え室にご挨拶に伺った時に大きな拍手をいただいたのがとてもうれしかったです。

このように些細なトラブルはたくさんありましたが、自分なりにベストは出せたと思います。先生方の期待に応えられたかどうかはわかりませんが、緊張や不安が強かった分、大きな達成感と充実感が得られました。このような大きなイベントは私のキャリアの中でも初めてのことで、それをやり遂げたことで大きな自信もつきましたし、今後のモチベーションにもつながると思います。将来思い返したときに私のキャリアの大きな転換点となるのではないかと自分でも期待しています。

緑内障を始めた時にはまだレクトミーが全盛のころで、大御所の先生方が大勢いる中で、どうやっても入り込むすきはありませんでした。3年前にインプラントが承認されたときに、これはチャンスだと思い、いち早く取り組んできた成果が今回のことにつながったのだと思っています。もちろんこれで終わりではありませんので、これをきっかけにステップアップしていければと思います。

最後になりますが、このような機会を与えてくださった大橋先生をはじめとする世話人の先生方、ジャメックスのスタッフの方々、参加してくださった多くの先生方、そして私を推薦してくださった稲村先生に深く感謝申し上げます。

2015年8月20日 記

